

7. いまなお続く差別

(1) 差別の存在

退所者に対する差別は、今も続き深刻な状態である。「いまだに、とても怖い。びくびくしている」という声がある。また、「後遺症」が偏見と差別の一つの要因であること、したがって、後遺症の程度で、現状は異なるとおもわれるが、十分分析は出来ていない。また同時に、カミングアウトして差別に対して必死に「闘い」、克服している人たちもいる。

「直接的にはないが、今もあると思っている。面とむかっていわれた事もないが、この病気は自分との闘いみたいなもので挫折すれば終わりだ。」(1941年生 男性)

「今の30代より若い人は何も知らない。但、黒川温泉問題など、今まだかわらないものがたくさんある。当事者としてカミングアウトしている自分はかわった。全々ちがう。ビクビクしないで生きられるいつでも、平常心。でクヨクヨがこの2~3年、全くない。」(1938年生 男性)

「人に言えない…。近医には話せない。いつもベールをまとっている。地元であればあるほど、そのベールは厚い。」(1941年生 男性)

「初めて園の中で重症の方に接した時は、正直言って『こわかった』。顔も崩れているし、ひどいと思った。治療するまでにどんどん進行してしまった人たち。薬もなかったし、副作用もひどかった。こういう外観的にすぐわかる人をたまに見ると、こわい病気、そばへ行くと移る等という差別が出てくる。初期の治療、対策が重要だと思う。」(1950年生 男性)

差別は消せない

「差別というのは消えないのではないですか。27歳で、入所前に行った病院で同じ部落の知り合いの看護婦が見せた態度で嫌われていると感じたことが、私に相当しみついている。あの時から世間の人々が怖い。だから同じ部落の人と顔を合わそうとしない。会いたくない。」(1930年生 女性 1957年入所)

「まだ100年は差別が続くと思っている。身内になると差別がきつくなる。長男の結婚に際し、相手の親は、一切他の親族に秘密にした。結婚式の参列は、自分と相手の両親の3人だけだった。」(1937年生 男性)

「自分の中の差別」

以下のように、それは外部からの「差別」のみでなく「自分の中の差別」からも生まれてくるものであるという語りもある。

「特に、”自分の中の差別”である。最近の人々は、当病のことを知らないなので、差別に

さえ、つながらない。恐怖や不安を作り出しているのは、自分の心である。確かに、うわさなど、見聞した情報が、差別に因るものであり、それを増大させているのだが、他からは、直接何もされなくても他人をみると全て、”自分に何かするのではないか”という被害妄想的な感情が、自分の中にある。他人をそういう人とみている自分の方が、差別している側だと思ふことがある。」(1947年生 男性 1968年入所)

「他人の差別というか、自分の中に今でも他人と付き合うことに対する遠慮はある。今あなた(調査員)との間にも薄いベールがある。自分は自分の子供を風呂に入れたことはない。家内には今でも不思議がられる。ただ子供の顔を見ていて、自信がついたから、孫とのスキンシップは大丈夫。今度は子供が不思議がっている。小さい子供ほどどうつりやすい、という話が頭の中にたたき込まれているようだ。『抱いてくれや』と家内に言われて、おとこはそんなことをしない、と強がっているふりをしていたが、本当は抱きたかった。家内がいないときに肌がふれないように、服ごしになるように何度も抱いてみた。子供が大きくなって行って自信がついてきた。」(1935年生 男性)

そして、周囲の人からはもちろん、療養所の職員、さらには肉親、親族からさえ「差別」されているという回答があることは深刻である。

周囲の人から

「今はないけれど、職場の人達とコーヒータイム等している時に、なにげなく見た、テレビのニュースでハンセン病の事などが流れ、その人達の反応があまり好ましいものでなかったとき、『自分もそうだったのよ、園にいたのよ』と言った時のその人達の反応はどうなんだろう、と思うと、とてもこわいし、これは自分が死んで墓までもっていくしかないと思っている。」(1947年生 女性)

「今なおこの病気に関する理解が浅く、周囲の好奇の視線に正直言って精神的にも苦悩が多いのです。長男の嫁に兄がいるがまだ独身なので、今後結婚話出た時、一体どうなるか、心配している(＊妹の結婚相手の親はハンセン病だ - という謂で差別がおきるのでは、という)。」(1937年生 男性)

「芯から信じられない気持ちだ。わかりきっていないと思う。病気を理解して世話をしてくれている人(女性)でも、晩は怖いという。孫には移らないかと聞いてくる。自分でも悪い人の様子をみれば、病気にならないとおもうけど、なるのではないかという不安がある。」(1939年生 男性)

「柄のないコップでお茶を出したりする。(手に後遺症があるので飲めない。だから飲まない。)わからんでやってると思うが、自分では差別されているのかと考えてしまう。傷つく。相手に嫌な目で見られているのではないかと思う。」(1918年生 男性)

「園の時の友人は、社会に出て世帯を持っているが(妻子は病を知らず)妻にまとも

った補償金が入ったのをいぶかしげに思われ、ビクビクした生活を送っている。」(1931年生 男性)

「今年(2004年)2月から3月。公民館に行く時2～3名の女性の方に出会った。名刺を渡そうとした時、1人の人はイヤな顔をして手を前に出してとめるようなしぐさをされた」(1941年生 女性)

「病気を知っている人(近所の人、親せき)との関係は変わっていない(途切れたまま、修復されず)。自分から声をかけようとも思わない(あいさつ程度はするが、それ以上には...)」(1942年生 男性)

「街で、賤する親が、『言うこときかないとこんなになりますよ』と言われたとき」(1942年生 男性)

「小さい雑貨店に買い物に行ったら入所者のことを見下げた言葉で話す人がいた。理解してるように見える人でも陰でこそこそと言う人もいる。」(1943年生 女性)

「世間にあるのは当然。お金をもらうのはとんでもないことだという人もいる。後遺障害に対する無理解もある。」(1943年生 女性 1964年入所)

「今でも自分の病気のことをなのれない。今も昔も差別・偏見は存在する。」(1944年生 女性)

「人に言えない...。近医には話せない。いつもベールをまとっている。地元であればあるほど、そのベールは厚い。」(1941年生 男性)

「熊本地裁での勝訴判決は出たが、実際地域の中で普通の生活を送ることが出来ないのであれば意味はない。黒川温泉での宿泊拒否問題にあるように、偏見差別がなくならなければ人間(人権)回復にならない。」(1942年生 男性)

家族、親族から

「親せきの人が食器を区別する。」(1934年生 女性)

「まだある。私の兄弟達もいい例でしょう！人権侵害だから差別はやめてほしい。」(1932年生 男性)

「兄の結婚式にも呼ばれない。通知がない。後になって、挨拶に来たが放り投げた。母はそうは言うなと泣きながらなだめた。「お前の病気でどれだけ難儀したか」と差別してきた兄が最近、「おまえが勝ったね」と言った。実の兄が、本当に差別したわけではない。むしろ世間体を気にしなければならなかったのだ。お互いが気を使っている。」

(1924年生 男性)

「再々婚したことにより、お金を貸したり、長兄死去後はいろいろ面倒を見てやったつもりなのに、たまたま甥の不幸(甥の娘の破談や甥の会社の斜陽)があって、お酒を飲んだ際、自分が病気だから何もかもうまくいなくなっているのだと嫌味を言われた。」

(1926年生 男性)

「『金もらって』と親族が言うことがある。明白な差別でないか。」(1931年生 男性)

国、県、職員から

「国、県、市はきれいごとだけで済している」(1952年生 男性 1967年入所)

「園の職員等でも、一步園の外に出ると人間的な関わり、関係を持ってない場合があった。せっかく、何年も一緒にすごして来たのに。(残念)」(1922年生 男性)

「直接はない。治療費のことで、事務の人によっては違う。人が代われば次の人が知ってしまう。表で言う人はいない。それが問題。保険費の直接請求が可能になればプライバシーが守れる。そう簡単には人のつながりは変わらない。形式的な守秘義務などというものは信用できない。法律が変わったから大丈夫ですよ、というだけでは甘い。「障害者」の定義もおかしい。変な目で見られるよりは行かないほうがいい。(1924年生 男性)

入所者から

「今は地域では差別を感じない。一度、退所者への給付金が支給されるという事で近年園に出向いたら、入所者に「外で遊べてくらせていいな」とチラッと言われた。そんな事ないのに...と思った。」(1928年生 男性)

(2) 無くなった、よくなった

良くなった、無くなったという声もある。闘いによって周囲を変えている姿も見られるが、同時に、ハンセン病元患者と知られなければという限定が着いている場合もあることにも注意が必要である。

「現在、他の元患者から聞いたことがない。以前は退所者同志、道で会っても目もそらす、あいさつもしないというのを聞いたことがある。今もあるかもしれない。」(1952年生 男性)

「逆によくなって来たとは感じる。黒川事件については、県がもうちょっとうまくやればよかったのと思う。」(1930年生 男性)

「今の30代より若い人は何も知らない。但、黒川温泉問題など、今まだかわらないも

のがたくさんある。当事者としてカミングアウトしている自分にはかわった。全々がう
ビクビクしないで生きられるいつでも、平常心。でクヨクヨがこの2～3年、全くない。」
(1938年生 男性)

「無い。他の人は知らないけれど、ね。」(1925年生 男性)

「現在は差別は感じない。例えばゲートボール仲間でも、全生園出たとわかっていても
対応は変わらない。旅行へもけっこう行ったし、飲食も供にした。」(1928年生 男性)

「今は地域では差別を感じない。一度、退所者への給付金が支給されるという事で近年
園に出向いたら、入所者に「外で遊べてくらせていいな」とチラッと言われた。そんな
事ないのに...と思った。」(1928年生 男性)

「後遺症がないから知らないふりをすればそれで済むが後遺症のある人は大変だと思
う。」(1945年生 男性)

「自分たちがそうと知られていないので、わからない。」(1945年生 男性)

「自分の場合はハンセン元患者と口に出していないから差別受けてない」
(1954年生 男性 1967年入所)

本人は、感じていないが、妻が感じているという場合もある。

「自分は差別を感じたことはないが、妻はまわりに話したことで差別を感じると言っ
ている。」(1940年生 男性 1970年退所)

(3) 厚労省へ

差別解消を厚労省に求める訴えもある。

「国、県、市はきれいごとだけで済している」(1952年生 男性)

「厚生労働省への手続き。もっと簡素に出来ないか。身体の不自由な人、困るのではな
いか。書類が多すぎる。」(1951年生 男性)

「継続診察券について、毎月、成人病が気になって通い出した所、本病よりも、成人病
のためにくることが多くなった。1ヶ月で有効期間が切れる。1ヶ月ごと更新しなければ
ならない。」(1926年生 男性)

「厚労省の郵便物 - 大きな袋で中身は葉書一枚。A4サイズの折らない文書一枚。ポスト
にも入らないサイズ。工夫の余地ないか。差別はないが、一時金の振込み時、厚労省

800万（通帳の）の記載をみて、銀行の若い女性が何をやっていた人ですかと聞かれた - 即座に退職金ですとゴマ化した。」（1937年生 男性）

「給与金について、和解はしたけども、格差がみられるので、平等にしてほしい。社会復帰する為に給与金の事等ケースワーカーから説明してほしかった。全員に社会に出るための総合的なものを詳しく説明してほしかった。本人が納得できるように。」（1946年生 男性）